

第36回日本プラセンタ医学会大会 抄録



会期：2025年11月9日（日）
会場：サン・ピーチ岡山

〔日本プラセンタ医学会 趣旨〕

プラセンタ療法は、全身の細胞に効果があります。そのことに気付いた先人の研究を引き継ぐ形で、わが国において50年以上にわたり飛躍的に発展を遂げてきました。

本医学会は、2007年の第1回大会から、プラセンタを積極的に使い、多くの患者さんを治療している先生方の経験を集約し、かつ、さらなる普及と発展に努めてきました。また毎年、基礎研究分野での新しい報告がいくつもあり、プラセンタの価値がさらに高まっていることを実感しております。

今後のプラセンタ療法の在り方は、多くの病気の源である“老化を治す”にあると考えています。ここ数十年、抗加齢治療の発展はめざましく、近年では“老化は病”となり、“老化を治す”の意識と共に、その原因を追究する基礎研究が進み、治療の確立に光が見え始めてきました。

私たちにできる事。それは、プラセンタ療法をアンカードラッグの一つとし、この療法に正しい理解を持つ医療者が尽力し協力し合ってより正確なデーターを蓄積し、よりの確で最適なプラセンタの使い方を明確にしていくことです。

そして、この活動と情報を日本プラセンタ医学会の会員と共有し、多くの患者さんに届ける事により、“より豊かな人生”を提供できると考えます。

一般財団法人 日本プラセンタ医学会
理事長 中村 光伸

第36回日本プラセンタ医学会大会開催にあたって

胎盤抽出物（PE：placental extracts）治療との出会いから現在まで —胎盤抽出物治療の必要性—

大会実行委員長 川口 光彦
医) 川口内科 川口メディカルクリニック 院長

肝臓専門医として医療従事してから早や40年あまり経過しました。40年間、寝る間も惜しんですべての肝臓病の患者様の完治をめざして日夜いろいろなことに取り組んできましたが、ある時、基幹病院での肝臓診療に限界を感じ、一転肝臓病の発症予防医療の構築をめざして平成18年に世襲開業しました。開業後外来診療をしていたある日、長年C型肝炎でフォローしていた女性が、掌蹠膿疱症という難治性皮膚疾患に連日悩まされ、いろいろな医療機関に通院した挙句、この疾患の権威である四国の皮膚科医にたどりつき、その先生から胎盤抽出物治療を勧められ、“その治療を受けさせてほしい”と相談しに来られたのが、私と胎盤抽出物治療との出会いでした。その後ラエンネックという注射薬が肝臓病の治療に保険適応であるということを知り、以後多数の肝臓病患者にラエンネックを投与してきました。さらにメルスモンという注射薬の存在を知り、保険適応である更年期症候群に対しても治療を行ってきました。現在、月にラエンネックを44例、メルスモンを25例に投与しています。胎盤抽出物製剤にはHGF、EGFという成長因子が含まれており、この薬剤を投与することで、肝細胞、皮膚細胞の増殖作用が活発になることが知られています（ラットの動物実験）。若いころ、劇症肝炎の病態のように急速かつ重篤に臓器の萎縮・変形をきたすような疾患を治療する際に、傷害を受けた肝細胞がどんどん増殖していくような薬剤が世の中に実在するかどうか文献でよく調べたものでした。ラエンネックという胎盤抽出物製剤は、肝疾患治療を専門的に行っている私にとって非常に興味のある薬剤のひとつでした。そこで難治である肝硬変患者に肝細胞増殖を期待する目的でラエンネック投与を開始して、今に至っています。最近は脂肪肝炎に対しての効果を検討しています。



一方、胎盤抽出物治療はいろいろな医療機関で保険外診療に多く使用されています。ただデータベースのないところでいろいろな使われ方をしているため、世の中では胎盤抽出物治療に対して偏見も生じています。まっとうに使用している医師たちは、このような状況のため、胎盤抽出物治療に憚(はばか)れることもしばしばです。

2016年10月9日第20回日本胎盤臨床医学会を岡山で開催して以来、9年ぶりに岡山の地で、学会名称変更となった日本プラセンタ医学会を開催することになりました。特別講演として東京医科大学医学総合研究所未来医療研究センター 分子細胞治療研究部門 特任教授 落合孝弘先生、地方独立行政法人岡山市立総合医療センター岡山市立市民病院副院長 狩山和也先生、国際医療福祉大学三田病院放射線診断センター准教授、加齢画像研究所 所長 奥田逸子先生の3名の方々にご登壇していただき、各分野の得意とするお話を聞かせていただくことにしています。さらにランチョンセッション、スポンサーセミナー、プラセンタ治療のエキスパートの先生方のパネルディスカッションを行い、学会を盛り上げていただく予定です。当日は年に1回行われる岡山市のビックイベントであります岡山市民マラソンと重なってしまいましたが、副委員長の金子法子先生と力を合わせて学会を成功させたいと思っています。皆様の忌憚のないご意見をお待ちしています。

エクソソームが医療をどう変えるか 疾患の診断治療から法規制に関する最近の話題

東京医科大学 医学総合研究所 未来医療研究センター 分子細胞治療研究部門 特任教授
落谷 孝広 (オチャ タカヒロ)

座長：川口 光彦 医) 川口内科 川口メディカルクリニック 院長

略歴

2018年まで国立がん研究センター研究所で分野長を務め、定年後は東京医科大学医学総合研究所で教授に就任。2023年より同、未来医療研究センター特任教授。ノンコーディングRNAや細胞外小胞であるエクソソームの診断治療の研究に従事。日本細胞小胞学会 (JSEV) の理事長やエクソソーム国際協会のオフィシャルジャーナル JEVのAssociate Editor, Cancer ScienceのAssociate Editorなどを務める。

2019年から6年連続で、Web of Scienceの発表する高被引用論文研究者 (highly cited researcher) に選ばれている。また2つの独立した学術調査機関が発表する世界のスクolarランキングでは、落谷孝広はエクソソームの研究領域で、ともに世界第1位にランキングされている。



主な受賞歴

SGH特別賞 (2024年)、日本再生医療学会功績賞 (2023年)、2019年度高松宮妃癌研究基金学術賞 (2019年)、ISEV2019 Special Achievement Award (2019年)、2018年度文部科学省ナノテクノロジープラットフォーム「秀でた利用成果」優秀賞 (2018年) など。

地球上のあらゆる生物種に共通に備わっている恒常性維持のシステムの一つが細胞外小胞 (EV) による情報伝達である。この異種の生物間でも情報交換に使われているEVの一種であるエクソソームには、non-coding RNAが内包されており、生物の発生から成長、そして疾患や老化、死に至るまで、それぞれの過程で幅広い生物学的な意義を持つことが明らかになりつつある。最近では、植物やバクテリアの分泌するエクソソームの研究も加速している。本講演では、エクソソームが有するmicroRNAなどの情報が、がんをはじめ、消化器疾患や脳疾患、心疾患をはじめとする多くの疾患の診断や治療にどのように応用されようとしているのかに焦点を当て、その開発現状と技術的課題、さらには治療薬開発における法規制のあり方などについて議論する。

食事性肝障害（健康障害）2025

地方独立行政法人岡山市立総合医療センター 岡山市立市民病院 副院長
狩山 和也（カリヤマ カズヤ）

座長：川口 光彦 医）川口内科 川口メディカルクリニック 院長

略歴

平成3年3月 岡山大学医学部医学科 卒業
平成3年4月 岡山大学医学部第一内科 入局
平成3年5月 岡山大学医学部附属病院第一内科 医員（研修医）
平成3年10月 岡山済生会総合病院内科 医師
平成5年10月 医療法人みのり会北川病院内科医師
平成8年10月 岡山大学医学部附属病院第一内科 医員
平成12年11月 倉敷中央病院消化器内科 副院長
平成13年5月 総合病院岡山市立市民病院内科 医長
平成22年4月 総合病院岡山市立市民病院肝臓内科 部長
平成29年4月 地方独立行政法人岡山市立総合医療センター岡山市立市民病院 内科主任部長
令和2年4月 地方独立行政法人岡山市立総合医療センター岡山市立市民病院 診療部長
令和5年4月 地方独立行政法人岡山市立総合医療センター岡山市立市民病院 副院長著書



学会役員

日本消化器病学会評議員
日本肝臓学評議員
日本超音波医学会代議員
岡山大学消化器・肝臓内科 臨床教授
岡山大学医学部教育プログラム評価委員

近年、肝細胞癌の背景因子が大きく変化している。従来はウイルス感染が主因であったが、現在はNBNC（非B非C型）肝癌が増加している。この変化の背景には腸内細菌叢の異常とleaky gut syndrome（腸管透過性亢進症候群）が重要な役割を果たしている。特にKlebsiella pneumoniaeの増加が肝癌発症の鍵となる。

現代の食事には「五毒」と呼ぶべき有害物質が含まれている：①砂糖（果糖）、②小麦（グルテン）、③植物油（ヒドロキシノネナール）、④乳製品（カゼイン）、⑤食品添加物。これらは依存性を引き起こし、leaky gut syndromeの原因となる。果糖は糖化反応により終末糖化産物（AGE）を形成し老化を促進する。小麦のグルテンは消化困難なペプチドを産生し、植物油は製造過程でヒドロキシノネナールを生成する。乳製品のカゼインは β カソモルフィンとなり依存症を引き起こす。

演者の研究では、MASLD患者30例に対して「パン・麺類・ジュースのみ摂取中止」の食事指導を3ヶ月間実施した結果、体重、BMI、肝機能（AST、ALT、 γ -GTP）、HbA1cが有意に改善した。

食事の質を変えることで肝機能は明らかに改善する。毒の inputs を減らし、解毒力を向上させることが肝要である。

たるみの皮下構造を画像診断学的に診る

国際医療福祉大学三田病院 放射線診断センター 准教授

加齢画像研究所 所長

奥田 逸子（オクダ イツコ）

座長：金子 紀子（医）いぶき会 針間産婦人科 院長

略歴

川崎医科大学卒業後、国家公務員共済組合連合会虎の門病院
2010年 国際医療福祉大学三田病院放射線診断センター 准教授
同年 鈴鹿医療科学大学 客員教授（兼務）
2014年 東京科学大学臨床解剖学分野 非常勤講師（兼務）
2015年 聖マリアンナ医科大学放射線科 客員教授（兼務）
2017年 慶應義塾大学医学部放射線診断科 非常勤講師（兼務）
2020年 加齢画像研究所ONI 所長（兼務）
2024年 久留米大学医学部解剖学講座 客員教授（兼務）



著書

- ・すぐ実感! 「マイナス10歳」カオキン体操
- ・顔のたるみ しわ 老け 顔太り 自力で一掃! 名医が教える最新1分美顔術
- ・おなか太り 何歳からでも自然とくびれた! 名医が教える 1分美腹スクワット
- ・女性の尿もれ・ゆるみ・臓器脱 自力で克服! 名医が教える最新1分体操大全

学会・資格等

日本医学放射線学会専門医・指導医、日本核医学会専門医・PET認定医、日本抗加齢医学会評議員・専門医、日本加齢画像医学会理事長、日本香粧品学会評議員・学術委員、特級コスメティックコンシェルジュ、日本体育協会認定スポーツドクター、日本乳癌検診学会評議員

抗加齢医学や美容医学への関心度は高く、様々なアンチエイジングアプローチが行われており、抗加齢や美容についてのエビデンスを求めた様々な画像解析が行われている。今日の画像診断装置はコンピュータの進歩によって急速な発展を遂げており、複数の検出器が搭載された多列CT（MDCT）や高磁場である3T-MRIが日常診療に用いられている。さらに、画像解析装置であるワークステーションの優れた画像処理能力を活用することで、3次元画像を容易かつ速やかに作成でき、体内構造を立体的かつ詳細に分析しうる。顔面もその一つである。

加齢による顔貌変化は顔面構造物の加齢性変化の積載によって生じる。表面の皮膚だけではなく、表情筋、SMAS筋膜、支持靱帯、脂肪、骨などの皮下内部構造物の変化も関与する。たるみを画像診断学的に診るためには、顔面構造物の解剖とそれらの加齢に伴う生理的变化の特徴を理解することが大切である。

本講演ではたるみに関与する解剖学的構造を概説するとともに、加齢容貌の内部構造について画像診断学的視点から述べる。

MASLD（代謝機能障害関連脂肪性肝疾患）に対するプラセンタの有効性

金沢医科大学肝胆膵内科学 名誉教授

土島 睦（ツチシマ ムツミ）

座長：川口 光彦（医）川口内科 川口メディカルクリニック 院長

略歴

1985年 金沢医科大学医学部卒業
1987年 金沢医科大学病院研修医修了
金沢医科大学病院消化器内科医員
1992年 金沢医科大学消化器内科学助手
2007年 金沢医科大学消化器治療学学内講師
2008年 金沢医科大学消化器治療学臨床准教授
2014年 金沢医科大学肝胆膵内科学臨床准教授
2016年 金沢医科大学肝胆膵内科学臨床教授
2018年 金沢医科大学肝胆膵内科学教授（講座主任）
2025年 金沢医科大学名誉教授



参加学会

日本内科学会、日本消化器病学会・評議員、日本消化器内視鏡学会、日本肝臓学会、日本消化管学会、
日本カプセル内視鏡学会、日本アルコールアディクション医学会・評議員、日本アルコール/薬物医学会・運営委員

近年、肥満や糖尿病、脂質異常症、高血圧などの代謝機能の異常を伴う脂肪肝である代謝機能障害関連脂肪性肝疾患 (metabolic dysfunction associated steatotic liver disease : MASLD)、また、MASLDの中でも肝炎を発症し肝硬変や発癌の発症母地にもなりうる代謝機能障害関連脂肪肝炎 (metabolic dysfunction associated steatohepatitis : MASH)が増加してきている。病態が進行し肝硬変に至った場合は根治的な治療として肝移植しかないのが現状であり、新たな治療薬の開発が望まれている。胎盤抽出物質 (placental extract : PE)は成長因子や栄養素を豊富に含んでおり、組織の修復、組織の再生、免疫調節および細胞増殖に関与することが知られている。そこで脂肪性肝疾患誘発モデルであるSHRSP5/DmcrラットにヒトPEを投与したところ、PEがもつ抗炎症作用、抗酸化作用、肝細胞の再生促進作用によって、脂肪変性や脂肪性肝炎は抑制され、肝障害の軽減、さらに肝線維症から肝硬変への進行を予防する可能性を見出した。さらに、MASLD患者にブタPEを24週間経口投与すると脂肪肝は明らかに改善した。このことからPEはMASLDからMASHへの進展の予防、肝線維化の抑制および肝硬変の進展を予防する極めて有用な治療薬の1つとなりえると考えられた。

プラセンタエキスと認知機能

富山大学 和漢医薬学総合研究所 神経機能学領域 教授/所長
東田 千尋 (トオダ チヒロ)

座長：川口 光彦 (医) 川口内科 川口メディカルクリニック 院長

略歴

北海道出身

1989年 北海道大学 薬学部 製薬化学科卒業

1991年 北海道大学大学院 薬学研究科 博士前期課程 薬学専攻修了

1994年 北海道大学大学院 薬学研究科 博士後期課程 薬学専攻修了

1994年 富山医科薬科大学 和漢薬研究所 高次神経機能部門 日本学術振興会特別研究員

1995年 富山医科薬科大学 和漢薬研究所 臨床利用部門 助手

1996年 富山医科薬科大学 和漢薬研究所 附属薬効解析センター 助手

2007年 富山大学和漢医薬学総合研究所 附属民族薬物センター 薬効解析部 助教

2010年 富山大学和漢医薬学総合研究所 附属民族薬物センター 薬効解析部 准教授

2017年 富山大学和漢医薬学総合研究所 神経機能学分野 (現・領域) 教授

2025年 富山大学 和漢医薬学総合研究所 所長



所属学会

日本薬理学会 (理事)、和漢医薬学会 (理事)、日本神経化学会、日本薬学会、日本生薬学会、日本食品化学学会 (理事)、日本神経精神薬理学会 (評議員)、Society for Neuroscience

アルツハイマー病では、脳でアミロイド β が沈着し神経回路網が破綻することで認知機能障害が発症/進行します。しかし現在の承認薬では、認知機能障害の進行を遅らせるにとどまっているのが現状です。

認知症の予防や改善には、発症時期よりもはるかに早く始まる神経回路の破綻を食い止め修復することが不可欠です。その達成は容易ではないものの、神経回路修復活性を、植物性生薬や動物性生薬のエキスや化合物から探索する研究を行ってきました。その中でプラセンタエキスを注目しました。肝機能改善作用、美白効果、更年期障害改善など、多彩な作用を有するプラセンタエキスは非常にポテンシャルが高く、医薬品としてもアンチエイジング素材としても長年使われてきたものですが、その作用機序が十分に解明されていないところも興味深い点です。

私たちの研究では、記憶障害を既に呈しているアルツハイマー病モデルマウスに対して、ヒトプラセンタエキスを投与すると記憶障害が回復しました。ブタ、ウマのプラセンタエキスでも同様に記憶障害が回復することも初めて見出しました。またプラセンタエキス中の活性成分や、記憶改善の分子メカニズムもわかってきました。

本ランチョンセミナーでは、これら研究成果を中心に、プラセンタエキスによる脳機能への効果について紹介します。

プラセンタはユビキチン-プロテアソームを介して細胞内のタンパク質のターンオーバーと蓄積を制御する

メルスモン製薬株式会社 研究開発部 部長
守屋 美恵（モリヤ エミ）



ユビキチン-プロテアソームシステム (Ubiquitin-proteasome system: UPS) は、細胞内において不要なタンパク質を選択的に分解するシステムである。分解すべきタンパク質にはユビキチンという目印が付けられ（ユビキチン化）、これをプロテアソーム（巨大なタンパク質分解酵素複合体）が認識して分解する。この高い選択性と厳密な制御性を持ったシステムにより異常な構造をもつタンパク質や役割を終え不要となったタンパク質が細胞内に蓄積されことなく分解されるため、タンパク質の恒常性の維持、細胞周期の制御、シグナル伝達や免疫応答など細胞機能の多様な制御に必須の役割を果たしている。

日本において、胎盤抽出物（PE）は美白（メラニン生成抑制）剤として化粧品や栄養補助食品に使用されている。しかし、PEのメラニン生成抑制作用のメカニズムは十分に解明されていない。チロシナーゼおよびTRP-1 (tyrosinase related protein 1) はメラニン色素生成に直接関与する重要な酵素である。美白剤として知られる多くの物質は、チロシナーゼ酵素活性を減弱させる（例：コウジ酸、アルブチン、エラグ酸）、またはチロシナーゼタンパク質の発現レベルを低下させる（例：2-amino-3H-phenoxazin-3-one）ことでメラニン生成を抑制する。最近になって、チロシナーゼのユビキチン化とそれに続くプロテアソーム分解によるチロシナーゼタンパク質の発現レベルの調節がチロシナーゼ活性を制御するメカニズムとして新たに認識されるようになった（例：オカダ酸、脂肪酸（リノレン酸））。

本研究ではウマプラセンタ（equine PE: EPE）をB16F1マウスメラノーマ細胞に添加し、EPEのチロシナーゼおよびTRP-1タンパク質に与える影響を評価した。その結果、古典的な物質であるプラセンタが動物細胞内において、ユビキチン-プロテアソームに深く関わり、細胞内におけるタンパク質の量的な調節を制御することを見出した。

本研究成果は、日本薬学会が刊行する国際誌「Biological and Pharmaceutical Bulletin」に本年8月9日付で受理され、間もなく公開される予定である。

論文題目

Moriya M. (2025) Placental extract inhibits melanogenesis by inducing the proteasome-dependent degradation of tyrosinase and TRP-1. Biol. Pharm. Bull, in press

「プラセンタはチロシナーゼおよびTRP-1のプロテアソーム依存的な分解を促進することでメラニン生成を抑制する」

『プラセンタ注射を利用した自由診療の実態について』

ー各部会より・症例ー

～プラセンタの現在地 過去と未来について～

美容部会：渡邊 千春

(医) 千美会 千春皮フ科クリニック 院長)

歯科部会：熊倉 正和

(熊倉歯科 院長)

埋没療法部会：原 靖

(原クリニック 院長)

東洋医学部会：長瀬 眞彦

(吉祥寺中医クリニック 院長

順天堂大学医学部医学教育研究室)

協賛企業・団体

株式会社 グロービア

北海道ナチュラルバイオグループ 株式会社

ランチオンセミナー協賛

株式会社 日本生物製剤

スポンサードセミナー協賛

メルスモン製薬 株式会社

出展企業

(株) グロービア
(株) セプテム総研
第一産業 (株)
(株) 日本生物製剤
メルスモン製薬 (株)
(株) UTP